

芥川龍之介『妖婆』の技法

川 野 良

「妖婆」は大正八年『中央公論』九月号及び翌十月号に「妖婆続篇」として発表された。その後は、昭和二十九年十二月発行、

岩波書店刊の『芥川龍之介全集』第三巻、昭和三十三年三月発行、筑摩書房刊の『芥川龍之介全集』第二巻、昭和五十三年十月発行、岩波書店刊『芥川龍之介全集』第三巻にそれぞれ収録されている。

『芥川龍之介全集』は他に、昭和三年発行岩波書店刊のものと、昭和十年発行のものが知られているが、いずれにも「妖婆」は収められていない。他の作品において、このような例は見ない。これについては、当時の「妖婆」に対する悪評が大きく関与していると思われる。

「妖婆」とは、その名のとおりに、怪奇趣味を思わせる。芥川が「妖怪」「怪奇現象」に興味を持ちはじめた時期や、その度合いは彼の書簡やエッセイを通して見る事ができる。

その初見は、明治四十五年七月十六日井川恭寛書簡に、
MYSTERIOUSな話しがあつたら教へてくれ給へ
あの八百万の神々の軍馬の蹄のひびく社の名もその時序にかい

てよこしてくれ給へ
ろせつちの詩集の序に彼は超自然事のかいてある本は何でも耽読したと書いてある
大に我意を得たと思ふ一笑

とある。次は、大正元年八月二日藤岡蔵六宛書簡に、

如例靜平な生活をしてゐる時に圖書館へ行つて怪異と云ふ標題の目録をさがしてくる此間生物怪録をよんだら一寸面白かつた其外比叡山天狗の沙汰だの本朝妖魅考だの甚現代に縁の遠いものをよんでゐる

とあり、芥川は「怪異」に興味を抱きながら一方では「甚現代に縁遠いもの」と評する。

芥川の内部に「妖怪」や「怪奇」に対する興味や好奇心は徐々に増していったらしく『椒圖志異』という、いわゆる「妖怪」「幽霊」の間書集がみられる。これは中国の有名な『聊齋志異』にのつとつた命名であろう。この『椒圖志異』は昭和三十年六月に、ひまわり社から発行された。巻首語はその解説において、

旧制高等学校時代から大学時代にかけて先輩、知己、友人、家族その他等から聞き、また読書等で知り得た「妖怪談類」

を消書したものの、少くとも大正三・四年ごろまでには完成したと思われる。

と述べ、芥川が大正二・三年ごろまでには妖怪に関する聞書をまとめていたらしいことを明かにした。

その後、ノートに「妖怪」についての覚え書は数々見られ、それを素材にして初めて小説化したのが、この「妖婆」である。

「妖婆」に続き翌九年「赤い鳥」の一月号に「魔術」を、更に「人間」の四月号から六月号にエッセイ「骨董羹」を連載し、その中に「妖婆」について

英語には *witch* と唱ふるもの、大むねは妖婆と翻訳すれど、年少美貌のウィッチ亦決して少しとは云ふべからず（略）日本にては山姥鬼婆共に純然たるウィッチならず

とあり、大正十年一月「新家庭」の「近頃の幽霊」にも同じような見解が述べられる。

大正十年の「赤い鳥」一月号に掲載された「アゲニの神」は「妖婆」と非常に関連が深いので、後に二者を比較して詳述する。その後は「四谷怪談」（大正十二年「新演藝」六月号）などの随筆を書き、最後に、昭和二年「改造」三月号に「河童」を発表する。また、芥川は、大正元年七月二十一日山本啓馨司宛葉書に、首から血が流れている絵と共に *THE MYSTERY OF Love is greater than that OF LIFE, WILDE.* と云う添え書をし、大正十三年、澄江の署名で

わがめづるばけものどもを画に描けり怖くなくともすこし怖がれ

という狂歌まがいの短歌とともに「一目怪」「のつべらぼう」「から傘の怪」などを描いている。これらのことから芥川が「妖怪」や「化け物」に対して愛着をおぼえていたことは確かであろう。

しかし、芥川の友人恒藤恭は、昭和二年八月「友人芥川の追憶」の中で

彼は妖怪を愛した。しかし妖怪の存在を信じてはいなかった。と述べ、前述の芥川の藤岡蔵六宛書簡の「現代に縁遠いもの」という言葉と併せ考えるに、芥川は妖怪そのものには興味を示しつつも、実際に怪奇現象がおこるとは思っていなかったらしい。芥川の蔵書には「聊齋志異」「夜窓鬼談」「夜譚随録」「珠廊談怪」など、「妖怪」「幽霊」に関する書物が多い。

二

さて次に、「妖婆」の梗概を述べる。

「日本橋辺の或る出版書肆の若主人」新蔵の体験したという話で、新蔵はある悩み事を友人の泰さんに相談すると、泰さんは近頃評判の「神下し」のお島婆さんのところで占ってもらったかどうかという。新蔵は泰さんにつき添われ、本所にある婆のところに行く、その家には婆ばかりか、行方しれずになり、新蔵の悩みの種であつたお敏がいたのである。婆は両親を失った遺縁の娘

であるお敏を引き取って、お敏の魂に婆娑羅の大神を祈り下して、神憑りになったお敏の口から神の差し図を仰ぐのである。そのためにはお敏は是非とも必要で、それはほとんど拷問に近い方法で行われた。だから婆は、お敏と新蔵の間をさこうとし、新蔵は泰さんの協力を得て、お敏を取りもどそうと苦心する。泰さんの苦心、苦肉の策は、婆の妖術によってことごとく妨害される。しかし最後には、婆が雷にうたれて死に、新蔵とお敏はめでたく結ばれる。

まず、婆に託宣を与える「婆娑羅の神」は奈良の新薬師寺に、国宝「伐折羅大将立像」があり、新薬師寺の本尊「薬師如来坐像」を守護する。この像は、忿怒の形相がすさまじく、矢や剣を持ち躍動感に溢れている。しかし、芥川はこのような「婆娑羅」の形相や性質には触れず、

何とも柔性の知れない神でやれ天狗だの狐だのといろいろ取沙汰もありましたが

と述べ、「バサラ」という音の持つ一種聞き慣れない不思議さに引かれて、この神を選んだのかも知れない。

『妖婆』は冒頭から、

無線電信や飛行機が如何に自然を征服したと云つても、その自然の奥に潜んでゐる神秘的な世界の地図までも引く事が出来たと云ふ次第ではありません。

あなたの御注意次第で、驚くべき超自然的な現象は、まるで

夜咲く花のやうに、始終我々の周囲にも出没去来してゐるのです。

というように、読者の注意を喚起するためのやや誇張した怪奇趣味が描かれる。続いて街角に普通に起っている出来事の中に、紙屑が必ず四つ辻でうずまうとか、その紙屑に必ず赤い紙があるとか、誰もいない停車場に電車がとまり、車掌が「御乗りですか」と声をかけるとか、不思議な現象を並べたて、読者の恐怖心を煽るような苦心が払われる。しかし、それらの挿話は真実味に欠け、誇張がすぎたかえって逆効果を与えたのではないか。

『妖婆』における怪奇現象をあげると次のとおりである。まずお島婆さんの風采が、

○大柄な、切髪の、鼻が低い、口の大きな、青ん鼈れに鼈れた姿が、黒地の単衣の襟を抜いて、睫毛の疎な目をつぶつて、水気の来たやうな指を組んで、魍魎の如くのつさりと、登一ぱいに坐つてゐました。

○ものを云ふ声が、鼈の呟くやうだつたと云ひましたが、かうして坐つてゐるのを見ると、鼈も鼈、容易ならぬ鼈の怪が人間の姿を装つて、毒気を吐かうとしてゐる……

と書かれている。「青ん鼈れ」という表現を芥川は、『手帳』五の中に「浮腫甚しくて死ぬ。青ぶくれ」と、老婆の死体を評するのに用いている。「鼈」は中国では、「蝦蟇仙人」となり毒気を吐き、霧や雨を呼ぶ。それは、近松門左衛門の『傾城島原蛙合戦』

音に聞たるもろこしに、蝦蟇仙人の、法をつたへて末の世に、めをどろかすばかりなり

とあり、また「聊斎志異」にも「青蛙神」という神がおり、その神は、

往々、巫の口をかりてものを言う。巫には、神の喜怒を察する力があつて「喜んでおられる」と言えば、福が来るし、「怒っておられる」と言うと、婦女子は居ながらにして愁嘆し、食事をやめてしまうものもある。(平凡社 中国古典文学大

系41・昭和四十六年四月発行)

とされている。

日本においても、歌舞伎や浄瑠璃に脚色された「児雷也豪傑譚」や「児雷也豪傑物語」などに見える「児雷也」が「蝦蟇」の妖術を使う。「蝦蟇」の妖術は、中国から伝わり、日本の怪奇談の中に定着した。「蝦蟇」はその異様な風体により、不気味がられ術を使う物、或いは妖怪とされたのかも知れない。

婆は午前二時になると、豎川の中へ入って水に頭までつかり、三十分あまりも入っている。寒中でも、頭に雪をつもらせて「鰻」のように泳ぐ。「鰻」も、妖怪の一種であつたらしく「夷歌百鬼夜狂」(新群書類従)に、

雨の夜の案山子とみゆる姿には

身の毛もぞつとよだつ川鰻

とよまれている。

婆の異様な風采の外にも、怪現象は色々描かれる。婆の書いたお札が死体の足裏にはりついていたり、座敷にしながら川へ身投げする音を聞く。又、新蔵とお敏の間をひきさくために、新蔵に対して様々な恐怖を与える。黒い鳥揚羽が新蔵の行く先々に現われ、新蔵とお敏が秘かに会っているところに、人間の目が浮び、新蔵が飲もうとするビールのコップに見慣れない人間の顔が現われ、眼が二つ写り、たえず人の視線を感じる。また、新蔵にも雲が揚羽の群のように思われ、電車の中で自分の座席の前のつり皮が電車が揺れるのに動かないという現象が現れ、また泰さんと新蔵との電話中に「あへぎ」「まだるい声」が入ってくる。泰さんには、お敏のことを相談しているので新蔵の恐怖心は益々募る。

芥川は、エドガー・アラン・ポーの小説を好み、ポーに関する講演を大正十年二月五日に東京大学で、昭和二年に新潟高等学校で二度行ない、芥川とポーとの影響関係も言及されている。ポーは、短編作家として、独特の怪奇的な小説を書く。ポーの「怪奇」は、人間の精神を極限状態に追いつめその反応を描き、超自然現象を伴わない。ポーの「裏ぎる心臓」は、主人公が一人の老人を精神的に脅迫し、直接的には手を下すことなく殺害し、死体をバラバラにして床下に埋める。彼は、見まわりに来た警官と話しているうちに、耳の奥で老人の鼓動が聞こえ、実際には何の音も聞

こえないにもかかわらず、被害を自白してしまう。その時の精神状態は「神経質も神経質、病的なまでにひどい神経質」「私の感覚は、異常に鋭敏になっておりました」(岩波文庫 中野好夫訳 昭和五十三年)と書かれている。

新蔵の目前におこった様々な怪奇現象も、実際に婆の不思議な力のまきおこしたものであると同時に、新蔵自身の思い込みで、新蔵の、婆とその妖術に追いつめられた彼の精神状態が、一種の脅迫観念を引き起し、あらぬ幻影を見させたのではあるまいか。烏鴉羽の群のような雲や、電車のつり皮などは、そのような要素を多分に含み、そこにポーの影響をみて取ることができる。

『裏切る心臓』の殺害の原因は「老人の眼」である。この「眼」の描写が、お敏と新蔵を監視するかにように現われる「眼」と酷似する。

そうです。あの眼でございます。淡蒼い瞳、しかもそれにす

「と一枚薄い膜のかかった——(裏切る心臓)」

I think it was his eye! Yes, it was this!

One of his eyes resembled that of a vulture

a pale blue eye with a film over it

(THE TELL TALE HEART Works of Edgar Allan

Poe in Eight volumes Vol. 1 London :

¹⁸⁹⁵
MDCCCXCV)

(これは岡本大祐によるが、芥川は MCMIV 1904 のポー全集

を持っており、芥川文庫に現存する)

例の電柱の根元の所に、大きな人間の眼が一つ、髑髏として浮び出したやありませんか。それも睫毛のない、うす青い膜のかかったやうな、瞳の色の濁つてゐる、何處を見てゐるともつかない眼……(妖婆)

芥川が、この箇所をヒントにしている可能性は大きい。

また「ビールのコップに映つた眼」は、芥川自身が、大正十五年四月に発表した「凶」の中に、

大正十四年の夏、僕は菊池寛、久米正雄、植村宋一、中山太陽堂社長などと築地の待合に食事をしてゐた。(中略)そのうちに僕は何かの拍子に饅臺の上の麥酒罐を眺めた。するとその麥酒罐には人の顔が一つ映つてゐた。それは僕の顔にそっくりだつた。しかし何も麥酒罐は僕の顔を映してゐた訣ではない。その證據には實在の僕の目は開いてゐたのにも関わらず、幻の僕は目をつぶつた上、稍仰向いてゐたのである。

(中略)菊池や久米も替る替る僕の座に來て坐つて見ても、「うん、見えるね」などと言ひ合つてゐた。それは久米の發見によれば、麥酒罐の向うに置いてある杯洗や何かの反射だつた。

と書いてゐる。これは『妖婆』の發表から六年も後のことであるが『妖婆』の手法の種あかしとされる。

三

次に『妖婆』と「アグニの神」の共通項を挙げて比較してみる。
 「アグニの神」の神「アグニ」は、古代インド神話中の神で元来火を意味する。また、この「アグニ」は、現在天理図書館が所蔵する肉筆原稿と比較するに、「ヴァルナの神」を直したもので、芥川は「アグニ」の持つ悪魔的な語感に引かれて、題に用いたものと思われる。

「妖婆」の場合も「アグニの神」の場合も占いは、

○それが又販網でも使ふのかと思ふ程、霊願があるといふのです。

○この壁に大金を使つて、親とか夫とか兄弟とか呪ひ殺したのも大勢ゐました。(妖)

○私の占ひは五十年来、一度も外れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が御自身御告げをなさるのですからね。

(ア)

というように、決してはずれることがない。占いの方法も、両者は、

○お島婆さんがいざ仕事にとりかかるとなると、まづその婆娑羅の大神をお敏の体に折り下して、神憑りになつたお敏の口から一々差図を仰ぐのださうです。(略)さう云ふ夢とも現ともつかない恍惚の境にはいつたものは、その間こそ人の知らない世界の消息にも通じるものの醒めたが最後、その間のことをすっかり忘れてしまひますから、仕方なくお敏に神を下して、そ

の言葉を聞くのだとか云ふ事でした。(妖)

○時々真夜中ニ私ノ体へ「アグニ」トイフ印度ノ神ヲ乗リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乗リ移ツテキル間中、死ンダヤウニナツテキルノデス。デスカラドンナ事が起ルカ知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、「アグニ」ノ神が私ノ口ヲ借りテ、イロイロ言ヲスルノダサウデス。(ア)

と書かれ、「神」を娘に下して、占う。その娘の素性は、

○お敏には幼馴染で母親の姪に当る或病身な身なし児の娘が、お島婆さんの養女になつたので(略)今の住居へお敏をおびき寄せると、殺しても主人の所へは帰さないと、強面に云ひ渡してしまつたさうです。(妖)

○「……警察署の調べた所ちや、御嬢さんを攫つたのは、印度人らしい……」

○「あれは私の貰ひ子だよ」(ア)

と、両方とも無理やりにつれてきたり、さらってきて、養女や貰ひ子にしたのである。『妖婆』において、お敏の前に使われていたお敏の幼馴染は、

お島婆さんの養女と云ふのも、引き取られてからこの役に使はれ通して(略)とうとうしまひには心の罪に責められて、あの婆の腰てゐる暇に、首を縊つて死んだと云ふ事です。

と、あまりの悪事や残酷さに、良心が咎めて自殺してしまつた。占ひに使われる二人の娘は、その役目をいやがる。すると婆はひ

とく折返す。

○夜更けを待つては怪しげな法を使つて、両腕を空さまに吊し上げたり、頸のまはりへ蛇をまきつかせたり、聞くさへ身の毛のよ立つやうな、恐しい目にあはせるのです。(妖)

○婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた簪をふり上げました。
…婆さんの罵る声に交つた、支那人の女の子の泣き声です。

(ア)

それに対する救出の計略は、

○お敏が神魔りの真似をして、あの婆に一杯食はせるのが一番近道だと云ふ事でした。(略) お島婆さんの所へ行つた時に、そつとその旨を書いた手紙をお敏に手渡しして来たのです。

(妖)

○イツモダト私ハ知ラス知ラス、氣カ遠クナツテシマフノデスガ、今夜ハサウナライ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ真似ヨシマス。

(妙子の手紙) (ア)

というのであるが、いざ実行する段になると、

○うはべは正氣を失つたと見せながら、内心は更に油断なく、機会さへあれば眞しやかに二人の恋の妨けをするなどと、魔の神託を下す心算であつた。(妖)

○アグニの神が乗り移つたやうに、見せかける時の近づくのをお今今かと待つてゐました。(ア)

と、最後は緊張していても、

○目に見えない蜘蛛の巣のやうに、四方からお敏の心を捕んで、何時か夢とも現ともわからない境へ引きずりこまうとするのです。(妖)

○睡気はおひおひと、強くなつて来るばかりです。…もうかうなつてはいくら我慢しても、睡らずにゐることは出来ません。

(ア)

と次第に、朦朧とした境地に陥る。

○何時もの通り死人も同様な眠に沈んでしまひました。(妖)

○殆ど生死も知らないやうに、いつかもうぐつすり寝入つてゐました。(ア)

最後に、無意識となつた娘に乗り移つた神と婆との対決となる。

○お敏さんは、神を下された時に、君たち二人の恋の邪魔をすれば、あの婆の命に關ると繰返し々々云つたさうだ。が、あの婆は狂言だと思つたので、明くる日鍵惣が行つた時に、この上はもう殺生なことをしても、君たち二人の仲を裂くとか、大いに息まいてゐたらしいよ。……

○お敏を手離すとあの婆が加持も占も出来なくなる。(妖)

○「いや、おれはお前の願ひなぞは聞かない。お前はおれの言ひつけに背いて、いつも悪事ばかり働いて来た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つてゐる。いや、その上に悪事の罰を下してやらうと思つてゐる。(略) お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで来た。もし命が惜しかった

ら、明日とも言はず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い」

「人を莫逆にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つてゐるのだえ。私はまだお前に敗れる程、遺憾はしてゐない心算だよ。早速お前を父親へ返せ——警察のお役人ちやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言ひつけになつてたまるものか。(略)さあ、正直に白状おし。お前は勿体なくもアグニの神の、声色を使つてゐるのだらう」

「お前も死に時が近づいたな。おれの声がお前には人間の声に聞えるのか。おれの声は低くとも、天上に燃える炎の声だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言ひつけに背くか——」

「この阿摩め。まだ剛情を張る気だな。よしよし、それなら約束通り、一思ひに命をとつてやるぞ」(ア)

『妖婆』は、対決の場面が短いが『アグニの神』は非常に長い。「アグニの神」は、婆に、神の命令に背く者は、罰を与えと言ひ放つ。しかも、その罰は「死」である。しかし、どちらも、今までの悪事に神が荷担したこともあり、思ひ上がりも手伝つて、婆はもはや真実の神の声を聞くことができない。

その対決の結果は次のとおりである。

○たつた昨夜一晩の内に、こんな鋭い曲折を作つて、まんまと

失敗してしまつたのです。(妖)

○「計略は駄目だつたわ。つい私が眠つてしまつたものだから、——勘忍して頂戴よ」(ア)

このように二人とも、失神していたため、自分達の計画が失敗したと思ひこんでいる。ところが、

○「君たち二人の思が神に通じたんだよ。お島婆さんは鍵忽と話してゐる内に、神鳴りに打たれて死んでしまつた」(妖)
○——その下へ仰向きに倒れてゐるのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てた儘、血だまりの中に死んでゐました。(ア)

と、二人の婆は死んでしまふ。

○して見ると、僕の計画は、失敗に終つたのに違ひないんだが、その又計画通りの事が實際は起つてゐたんだらうじやないか。しかもお島婆さんがそれを狂言だと思つた揚句、とうとう自滅したなんぞは、どう考へても予想外だね。これちや婆娑羅の神と云ふのも、善だか悪だかわからなくなつた。(妖)
○今夜の計略が失敗したことが——しかしその爲に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不思議なことが、やつと遠藤にもわかつたのは、この瞬間だつたのです。「私が殺したのちやありません。あの婆さんを殺したのは今夜こゝへ来たアグニの神です」(ア)

やはり「神」は本来「善」であり「真」なのであるから、「悪一

に對して罰が下ったのである。

以上のように「妖婆」と「アゲニの神」は構造が非常に似通う。お島婆さんも印度人の婆さんも、それぞれに神を祭り、託宣をする。そのためには媒介としてのお敏・妙子がいなければ、占いができない。しかし、二人とも「盗んできた」娘たちであつて、彼女らを利用して、金儲けや、悪事を働く。その揚句が神から罰を下され、死を与えられる。「盗んだ娘」によつて託宣を得ようとしたこと、神を惡事に利用しようとしたことに對する報いが死であつた。

四

同様な構造は、大正十一年『中央公論』四月号に、告白体で書かれた『報恩記』にも窺うことができる。

阿媽港基内という大盗人が、盗みに入つた家は、昔恩をこうむつた北条屋彌左エ門の家で、その話を盗み聞きすると、北条屋の身代が傾いているらしい。それを救うべく基内が金を調達すると、今度は、その北条屋の息子彌三郎がそのいきさつを聞き、基内の恩に報いるために手下にしてくれと頼む。基内は彌三郎に雜言を吐き、足蹴にする。彌三郎は基内を恨みながら、報恩の名目で基内の身變りになつて死んでいく。基内の冥福を祈るために、曝し首を見た北条屋は、それが我息子の變り果てた姿であるのを見て、悲嘆にくれる。

しかし積惡の報と恩へば、これも致し方ございますまい。いや、寧ろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だつた位でございます。が、せめてもの恩返しに、陰ながら廻向をしてやりたい——かう思つたものでございますから、
(報恩記)

しかし倅も不運なやつでございました。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港基内に、一家の没落さへ致はれなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練だと思ひましても、こればかりは切なうございます。(略)
わたしはこの儘生きてゐれば、大恩人の基内を憎むやうになるかも知れません。(報恩記)

北条屋の店が破産をまぬかれたのは、基内の盗んだ金の力であつた。その事実を忘れ、北条屋は基内に情けをかけようとした。神は、その北条屋の身勝手に対する罰として、最愛の息子彌三郎の首を曝してみせたのである。

最愛の娘の死によつて、罰が下されたというのは、『地獄変』(大阪毎日新聞 大正七年五月七日(五月二十二日))にもみられる。絵師良秀は、「絵」を成就するためにはずいぶん無理無体な非常識なことをするので人々に忌み嫌われていた。というのは、良秀は、優れた絵師でありながら、眼前におこり、自分自身が見たことしか絵にし得ないのであつた。

ある日、堀川の大殿は、良秀に「地獄変の屏風」を描けと申し

つける。しかし、良秀は見たことしか描けないがゆえに、想像して描くことができず苦悶する。大殿は、良秀の乞いを容れ、檣柳毛の車に娘を入れて火を放ち、さながらの地獄絵を現出する。その娘が自分の最愛の娘であることを知りながら、良秀は「恍惚とした法悦の輝き」を浮かべて、それに見入る。「地獄絵」の屏風は完成し、人々の賞讃を集めるが良秀は、

自分の部屋の梁へ縄をかけて、縊れ死んだのでございます。

一人娘を先立てたあの男は、恐ろしく安閑として生きながらへるのに堪へなかつたのでございませう。

という悲惨な最期を遂げる。良秀は、見たものしか描けないという欠陥を持ちながら、あまりにも芸術至上主義でありすぎた。そのため、人々を恐ろしい目に遭わせ、その果てに最愛の娘は、地獄の火に焼かれて死に、自分自身も縊り死を遂げる。

これらの作品すべてに通じていえることは、芸術という「大義名分」のためには、どのような手段を用いても、他人から盗んだものであるが、芸術の素材にしてはばからないという考え方である。作品の中では「大義名分」そのものが色々な形を取って現れる。「妖婆」や「アグニの神」では、占いのため、「報恩記」では、家業のため、「地獄変」では芸術のためである。その「大義名分」のためにはどんなことでも許される。このような手前勝手な利己的考え方を、神という人間性を超えた絶対的な存在が許さなかつたのである。

こうした「大義名分」によって、自分の行動を正当化しようとするのは、既に『羅生門』（『帝國文学』大正四年十一月）にみられる。下人は最初は、死体から髪を抜いている老婆に対して、又「あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来」て、餓死するか盗人になるかと云う問題には「何の未練もなく、餓死を選んだ事だらう」という心境であつた。しかし、老婆の語、

「成程な、死人の毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ちやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ賣りに往んだわ。（中略）わしは、この女のした事は悪いとは思つてゐぬ。せねば餓死をするちやて、仕方がなくした事である。されば、今又、わしのしてゐた事も悪い事とは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするちやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ちやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである。」（羅生門）

を聞いてからは、下人の心に「或勇氣」が生まれてきた。

それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上がつて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動かうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷はなかつたば

かりではない。その時の、この男の心もちから云へば、餓死など云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

というように、下人の心は変化していく。最初は「盗みは悪」であつたものが、「生きるためには盗むことは悪ではない」となる。「生きる」ために「盗み」も正当化される。このような意識は、芥川の生涯にわたる文学上の意識であり、たえずそれに悩まされていたのではあるまいか。

(本学大学院研究生)

研究室受贈圖書雑誌目録(三)

金沢大学文学部論集(金沢大学) 第七号

花葉(花葉発行所) 4

岐阜女子大学紀要 第十六号

九州大谷国文(九州大谷短期大学) 第十五号、第十六号

金城国文(金城学院大学) 第六十三号

近代文学研究(上智大学) 第五集

近代文学論集(九州大学) 第十三号

研究紀要(尚絅大学) 第十号

研究紀要(日本大学人文科学研究所) 第三十三号、第三十四号

研究論集(開成学園) 第十四号

言語表現研究(兵庫教育大学) 第五号

言語文化(一橋大学語学研究室) 第二十三号

高知大國文 第十七号

甲南国文(甲南女子大学) 第三十四号

甲南大学紀要 文学編 64

語学と文学(群馬大学語文学会) 第二十四号

国語学研究(東北大学) 第二十六号

国語学研究と資料(早稲田大学) 第十号

国語教育(富山大学) 第十一号

国語研究(上越教育大学) 創刊号

国語研究(横浜国立大学) 第五号

国語国文(金沢大学) 第十二号

国語国文(高野山大学) 第十二・十三合併号

国語国文(東海学園女子短大) 第三十一、三十二号

国語国文学(岐阜大学教育学部) 第十八号

国語国文学(名古屋大学) 59・60

国語国文学(福井大学) 第二十六号

国語国文学研究(熊本大学) 第二十三号

国語国文学会誌(学習院大学) 第三十号

国語国文学会誌(福岡教育大学) 第二十八号

国語国文学報(愛知教育大学) 第四十四集

国語国文研究(北海道大学) 第七十六号、第七十七号、第七十八号